

「みち」

令和3年10月15日 発行

子どもたちの思いに応えられる教師に!!

今年度も半年が過ぎ、折り返しの季節となりました。1学期に予定されていた修学旅行や宿泊学習、運動会などが延期され、この2学期に実施している学校もあります。岩瀬地区音楽祭（合唱・合奏）や新人戦、岩瀬地区陸上交流大会も無観客とはいえ無事に行われ子どもたちにも活気が出てきました。

コロナ禍は、新たな感染者数こそ減少していますが、まだまだ油断はできません。先生方は、今できることに精一杯取り組んでいるものと推察します。コロナ感染に神経を使い、学校に判断を求められることも多くなり、心身の疲労もたまってきているのではないのでしょうか。心と体の健康に十分留意されることを願います。

折り返し地点に立ち、子どもたちには、自分たちの成長を振り返るよう促し、学年末になってどんな自分でいたいのか想起させてみましょう。新たな目標が見えてくるはずです。

先生方も子どもたちを見つめ直してみましよう。子どもたちの人間関係の変化や表情、行動をよく観察し、必要に応じて声をかけていかなければなりません。これまでとは違う姿を見せているかもしれません。一生懸命頑張っている子どもたち、様々な制限の中でも笑顔を見せてくれる子どもたちの思いに応えていきたいものです。

授業の基盤は、「学級経営」 子どもたちとの信頼関係を大切に！

爽やかな秋、集団としての学級の円熟度も高まり、学級の文化が出来上がってきたころです。「授業で子どもは育つ」「授業の中で集団は育つ」とよく言われますが、その授業の基盤は「学級経営」です。Q-Uテストや毎学期のいじめアンケートなどの結果を適正に分析し、一人一人の子どもたちに目を向け、声をかけ気かけながら、教師と子どもたちの信頼関係を築いていきたいものです。実施後の対応次第で子どもたちを傷つけてしまったり、いじめを増長させてしまったりして信頼を失ってしまってははいけません。

子どもたちが一人残らず目を輝かせる、笑顔のある学級づくりを期待します。

子どもたちの心に寄り添う教育相談を

- 教師の個人的な感情に左右されず目の前にいる児童生徒の心や気持ちを大切にする。
- 肯定的に。「きき上手」に。
- 教師自らが心を開き、率直な態度で接する。
- 児童生徒一人一人に分け隔てなく積極的な関心とかかわりを持つ。

学級担任が行う教育相談の留意点

- 普段の担任との関係によっては、相談を避け、心を開けない子どもも出てくる。
- 担任の普段の意識や言動と相談活動時の態度に矛盾があると相談関係が悪くなる場合がある。
- 学級担任だけでなく学年や学校全体で支援の方向性や確認を行う。

笑う門には福来る

学校にはユーモアの材料があふれています。子どもたちのユーモアを紹介します。ちょっとほっこりしてみませんか。

○ 国語の問題で

- ・「相談くらいしろよ、親友だろ。（ ）くさいじゃないか」
答え 汗（正答 水）

○ 保健体育のテストで

- ・中学生のかかりやすい病気を4つ挙げよ。
答え 仮病（その中の一つに）

○ 野外学習で

- ・生徒「送電線の下にしていると髪が薄くなるというのは本当ですか？」
ベテラン教諭 「俺に聞かないでくれ。気にしてんだよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふざけるな」と叱る前に発想の豊かさを受け止め、一緒に笑うくらいの余裕を持ちたいですね。



《がんばる子どもたち》

第1回 授業づくり研修会から

令和3年度第1回授業づくり研修会が須賀川市立第二中学校において行われました。講師には昨年引き続き佐藤学先生をお招きしました。各学校において研修を推進する立場の先生方がオンラインで参加し、多くの先生方が同じように学先生の講話を視聴するという研修となりました。新たな研修スタイルでの取り組みから成果や課題も見え、今後の研修の在り方の参考となりました。

授業参観から

- ・第1学年 数学科
- ・単元名 方程式
- ・授業者 矢吹 尚之 教諭

授業は感染症対策として参観人数を最小限にし、広い体育館で行われました。

中学校に入学して半年の子どもたちですが、授業者の矢吹先生とともに意欲的に取り組んでいました。授業開始3分で最初のグループ学習が始まり、ジャンプの課題に真剣に取り組む姿を見ることができました。

◎発表的会話に学びなし。

- ・話し合いが活発であればいい授業>と勘違いしてしまうが、そこに学びは成立していない。本時でも比較的小となしめのグループが学び上手だった。



グループ学習の様子

◎わからない子を放っておかない。

- ・他の子のものを写しても良い。諦めたままにしておかない。子どもたちのつながりを作り、「困ったな。」「どうするの?」「見せて。」が言える関係性を育てる。

事後研究会では<課題>について話題になりました。本時では共通の課題とジャンプの課題があり、授業デザインの良さを感じることができました。さらに発展させるために共通の課題に関わる時間を短くし、ジャンプの課題に取り組む時間を十分確保することが大切であり、説明するよりもジャンプの課題に挑戦させて自分たちでつかませていくほうが効果的だという話がありました。



《学先生の講演の様子》

佐藤学先生講話から

コロナ禍で起きていることの一つに「学校間格差」が挙げられているそうです。コロナウイルスの対応に追われ一斉授業にした学校のほとんどが落ち込み、この状況の中でも探究・協同を迫及していた学校は劇的に変わり伸びているそうです。「現状維持は後退である」と話す大学教授もいます。

『級友の背中と黒板を見て、ノートを書いてどれだけ学びがあるのか?』という学先生からの問いかけが突き刺さります。これから生きる子どもたちに必要な力とは何かを考え直し、授業について、学びについて私達教師も探究していかななくてはなりません。

<探究と協同について>

- 探究と協同のある「主体的・対話的で深い学び」は、このコロナ禍の中でも流れは止まっていない。
- 思考は一人でできるが、探究は協同でしかできない。だからグループでの学びが必要である。「思考」は自分との対話、「探究」は異なるもの・多様なものとの対話である。

<21世紀型の学びについて>

- 「口と手」で仕事をしていた【教える専門家】から「目と耳（と頭）」で仕事をする【学びの専門家】へ。
- 学びをデザインし、子どもたちと教材をコーディネートし、学びを省察する教師へ。優れた授業では、教師は、ほとんど話さないし、黒板には書かない。
- 最も大切なことは、「子どもたちを信頼し、尊敬すること」である。子どもたちは素晴らしい。伸びしろがある。未来に向かって協同して創造できる子どもに。